

土木広報センター

土木広報センターは、土木広報戦略会議の基本方針に基づき、自らが主体となる活動の実施（「土木の日」の活動を含む）、各委員会や支部、関係団体が主体となって行う活動との連携・調整、情報共有・発信などを行うことを目的とする。

平成29年度 土木の日および くらしと土木の週間 報告

本部

平成29年度の「土木の日」および「くらしと土木の週間」は、例年どおり全国規模で実施され、盛会のうちに終了しましたことをここに報告申し上げます。

1987年11月18日に「土木の日」を制定しましてから、2017年11月18日30周年を迎えました。各支部や各関係団体の多大なご協力を賜り、「土木の日」が全国的に浸透してまいりました。土木広報センターといたしましても、今後、より一層、一般の方々に社会資本の重要性を認識していただけるように活動を進めていく所存です。今後とも本行事に関しまして、多くの方々のご理解やご協力を

賜りますようよろしくお願い申し上げます。「土木の日」および「くらしと土木の週間」の実施にあたりまして、ご尽力いただきました多くの皆様方に心から御礼申し上げます。

また、このほど、土木広報戦略会議（2016年3月16日設置）は、「土木の日」ロゴマークを策定しました。「土木の日」関連行事にて使用いただくことで、土木との触れ合いを通じて、土木技術および土木事業に対する認識と理解を深め、社会資本整備の意義と重要性について幅広いコンセンサスの形成につなげたいと考えております。

土木の日記念行事

「土木の日」および「くらしと土木の週間」の本部行事として、「土木の日シンポジウム2017」と「土木コレクション2017」を実施しました。

土木の日シンポジウム 2017

2017年11月23日（木・祝）、東京都新宿区にある土木学会講堂において、二部構成のシンポジウムを約4時間にわたって実施した。70人を超える参加者があり、活気あるシンポジウムとなった。なお、各支部や来場できなかった人のために、シンポジウムの様子はYouTube（YouTube）を用いてライブ配信した。

土木学会の挑戦——地方創生に向けた「安寧の公共学」を目指して——

災害の頻発・激甚化に伴い、社会システムの脆弱性が顕在化してきている。2005年より人口減少時代に突入し、地域の活力低下も懸念されている。これからの社会資本整備は、従来の災害から

生命や財産を守ることに加えて、自然との共生や気候変動の抑制、さらに地方の個性を際立たせ魅力を引き出す、といった総合的な機能を有し人々の暮らしの安寧を支えることが求められている。こうした課題にあたっては土木技術を地域にどう役立たせるかという視点ではなく、地域にとって土木はどうあるべきかという視点から土木のあるべき役割を改めて考え直すことが必要ではないかと思われる。本シンポジウムでは、社会資本整備の新しいあり方、今後の方向性について地域づくりの技術や仕組みを研究する3名の若手研究者から話題を提供し、「安寧の公共学」の構築に向けて取り組むべき方策や考え方について議論を深めた。

東京工業大学・真田純子准教授からは、「石積みと石積み技術のこれからの価値」と題して、「石積み」の魅力が語られた。伝統的な工法である石積みは、良好な農村景観を生み出す基盤となるだけではなく、崩れても瓦礫を発生させず補修ができるサステイナブルな工法であり、住民みずからが施工可能な小さな工事ができ、それが土地に対する知識や責任の醸成につながっているとあった視点が紹介された。一方、石積みが時代とともに廃れた要因は、定量的な強度の保証や均質な施工



「土木の日」ロゴマーク



シンポジウム当日に「土木の日」ロゴマークを公表した

性といった社会からの要求にあり、石積みが構造的に弱いことにあるのではないことが指摘された。確かに課題はあるが、石積みには地域の下支えするポテンシヤ

ルは十分にある。それを引き出すためには「地域の実情に合わせる技術」の視点から石積みを見直すことが必要ではないかと述べられた。それに向けた具体的な方

策として取り組まれている、石積み技術の伝承を目指した「石積み学校」についても紹介された。

国土館大学・二井昭佳准教授からは、「エ



討論会の様子 (左: 島谷幸宏教授、右: 真田純子准教授)



討論会の様子 (左: 大石久和会長、中: 二井昭佳准教授、右: 高尾忠志准教授)



土木偉人映像展の様子 (高橋裕東京大学名誉教授)



土木学会から感謝の意を表して高橋裕先生へ花束が贈呈された

ンジニアリングとデザインの協働が生み出す新しい風景」と題して、堤防の建設を事例として紹介しながら、単一課題解決型から複数課題解決型へのパラダイムシフトの重要性が述べられた。講演では、ドイツ・ミルテンベルク市のメイン川における河川堤防の事例が紹介された。この堤防は、固定式の堤防とそこからせり上がる可動式の堤防とできており、それぞれ超過確率25年、100年の洪水に対応した高さとなっている。堤防の建設は治水上不可欠ではあるが、まちと水迎とを空間的に断絶する要素ともなる。これに対し、堤防の高さを低く抑える工夫により、空間の連続性を確保できるのはもちろん、堤防に熟慮されたデザインを施すことでそれ自体が地域の景観の独自性を高める要素ともなっていることが紹介された。こうした構造物の設計(エンジニアリング)と空間統合技術(デザイン)とが協働した社会資本整備の実践が地域の魅力を高める風景を生み出すことが述べられた。

九州大学・高尾忠志准教授からは、「地域再生に貢献する社会資本整備を推進するための仕組み」と題して、自身が務める長崎市「景観専門監」の取り組みについて紹介された。地方自治体の現場では良

いものを作りたいたいという熱意はあっても、複数の分野にまたがる実際の課題に対し、横断的に検討できる人材が不足しているというのが全国的な現状である。景観専門監は、市が運営する大小のプロジェクトにマネージャーや監修者として事業に一貫して関与する。この5年間で130事業の監修を行った。事業の質の向上のためには、研修やガイドライン、外部アドバイザーの招聘などの対応が一般的である。これに対し、景観専門監はインハウススーパバイザー（庁内調整役）として組織内を縦横断的に、また時間的に連続して事業に関わり続けることで、事業の方向性をぶれさせることなく、柔軟な組織内調整や情報共有ができる。それだけではなく、行政・市民・有識者を有機的に結びつける触媒効果や、人材育成の面でも大きな効果があったことが紹介された。

討論会では、九州大学・島谷幸宏教授をコーディネーターに迎え、土木学会・大石久和会長も参加し、議論が交わされた。大石会長からは、土木の目指してきた価値観として皆同じであることが尊ばれてきたが、そこではか買えないものがある道の駅に代表されるように、個別の地域で異なることが良いという価値観が共有されつつある。地方創生に向けて

は、これまでの同じものがつながついていくという「交流」を進展させ、それぞれの地域が異なることを主体的に受け入れ、互いに補完し合う「連携」ができるような社会形成が必要であることが述べられた。これに対し、地域それぞれが異なるためには、地域が主体的に公共事業を評価できるような仕組みが必要ではないか、また、地域が地域の在り様に責任を持てるようにすることが重要で、地域の公共事業に参加するような仕組みが効果的ではないか、といった意見があった。

土木偉人映像展 ― 古市公威 ―

『日本の近代土木を築いた人びと』（企画・大成建設株式会社、制作・日本映画新社、日映企画、監修・高橋裕、清水慶一）より土木学会初代会長・古市公威を上映。その後、河川工学の大家であり、映像の監修をつとめられた東京大学名誉教授の高橋裕先生にご講演いただき、九州大学教授の島谷幸宏を交えて活発に意見を交換した。

古市公威（1854～1934）は、開成所で学んだ後、仏エコール・サントラルに留学。帰国後に内務省に入省、32歳で

帝国大学工科大学学長に就任し、ヨハネス・デ・レーケらと共に木曾三川など近代治水の礎となった河川改修を推進し、河川法、砂防法の制定にも尽力した。また、日本仏学校（現法政大学）などの設立にも関わり、近代土木行政や工学教育の基礎を築いた。

高橋裕先生は、古市公威と同学年であり淀川改修などの治水に専心した沖野忠雄とを対比しながら、古市の多才さについて話された。古市の会長就任演説については、明治から大正にかけて工学が専門分業化していく中で、工学における土木工学の位置付けを明確にし、後進の進むべき道を示した点

が非常に重要であると述べられた。また、土木学会は古市・沖野の還暦祝いとして集められた資金をもとに古市・沖野の意向で設立されたというエピソードも紹介された。

シンポジウムの最後には長年に渡り土木偉人映像展において先人の偉業の解説をされてこられた高橋先生が本年度をもってご勇退されることから、土木学



11月20日オープニングセレモニーのテープカット

土木コレクション2017 未来の東京を見つけない、土木を巡る。

会から感謝の意を表して花束が贈呈された。

土木コレクションでは、土木界が保有する歴史的資料や図面、写真など、普段は目にする事ができない各種コレクションを展示、公開している。今年度はJR新宿駅西口の新宿駅西口広場イベントコー

ナーで、11月20日(月)から24日(金)まで開催し、約48000人にご鑑賞いただいた。

土木コレクションは二つのカテゴリーからなる。一つが「HANDS」。明治期から昭和初期までの土木事業を対象に、土木エンジニアによる手書きの図面などを中心に展示しているものであり、もう一つが「EYES」で、新しい土木のあり方や地域づくりのあり方など、新しいコンセプトを取り入れたプロジェクトを選んで展示しているものである。

今年度の新宿駅西口広場イベントコーナーでは、「土木コレクション2017 未



パネルを鑑賞する人たち

来の東京を見つけない、土木を巡る。」をテーマに、美しく繊細な手書き図面、芸術的な写真や映像、圧倒的な迫力の模型を公開した。特に、今回の展示では、会場3か所に設置したファサードをはじめ、各展示物前の解説用パネル、受付スタッフを着用するヘルメットやユニフォーム、アンケート回答者へのプレゼント用ステッカーに至るまで、「土木」をモチーフにした印象的なデザインを軸に、会場全体の統一感を意識した。簡易パネルによる展示では、これまで全国で展示してきたコレクションのうち、関東・甲越エリア(箱根地区国道1号施設群や萬代橋、勝



「土木」をモチーフにした印象的なデザイン

沼砂防堰堤など)を中心に総数18点(22枚)の展示を行った。また、今回も昨年同様、オンライン博物館「ドボ博」のPR映像を流すとともに、実際に参加者が体感できるように、タッチパネルによる体験コーナーを設置した。さらに、今年も東京都建設局との共催で、「東京 橋と土木展」と同時開催とし、建設局が所有する貴重な図面や写真、隅田川に架かる国の重要文化財指定の3つの橋(勝鬨橋、永代橋、清洲橋)の模型と昭和女子大学の田村圭介准教授による新宿駅立体模型(都庁前駅と西新宿駅を加えた完全版)などの展示を行った。23日(木・祝)には、田村圭



東京都建設局(共催)によるミニ講演の様子

介准教授ならびに千葉工業大学の八馬智教授のミニ講演が開催された。

新宿駅西口広場における土木コレクションは、これまで通り小学生の親子連れからお年寄りまで幅広い年代の方々に足を運んでいただいた。同会場での展示は9年目となるが、例年、本展示会を楽しみにしているファンも多く、特に、今年は、スタッフ用のヘルメットとユニフォームを着用できるサービスを実施したところ、SNSにより拡散いただくことに繋がり、さらに、多くの方にご来場いただけた好循環も生まれた。また、アンケート回答者にプレゼント配布した特製クリアファイルおよびステッカーにも関心が集まった。今後も土木コレクションで収集したコンテンツの持つ魅力を活かしつつ、市民のみなさんの土木に対する理解を深めていけるような企画を展開していきたい。

北海道支部

ことし支部創立80周年を迎えたことを記念し、11月17日(金)、札幌市内のホテルにて「未来の北海道と土木」をテーマに、記念式典・記念講演会・選奨土木遺産認定書授与式及び記念祝賀会を開催した。会員、来賓ら291人が出席し、節目を祝った。

記念式典では、支部80周年の歩みを出席者で振り返り、記念講演会では、大石久和会長より「土木は『社会の安寧』を支持できているのか」、北海道大学大学院工学研究院岸邦宏准教授より「北海道の未来のために我々がすべきこと」と題した講演をいただいた。選奨土木遺産認定書授与式では、新たに認定を受けた「滝の上発電所施設群」(北海道企業局)及び「網走橋」(国土交通省北海道開発局網走開発建設部)について認定書と銘板の授与が行われた後、受賞者からそれぞれ当該土木遺産の概要を報告いただいた。



記念講演会の様子



土木コレクションパネル展



室蘭地区イベント: 知利別川環境学習体験フェスタ2017「水と生き物・いのちのつながり」

記念祝賀会には、来賓、土木学会関係者など166名の参加があった。当日午前中に「未来の北海道のために、土木の力でやりたいこと」をテーマに開催した「若手技術者交流サロン」について、参加学生自ら報告があり、祝賀会参加者と活発な意見交換がなされた。

11月16日(木)〜17日(金)には、JR札幌駅と大通を結ぶ地下歩行空間北3条交差点広場(西)にて、土木コレクションHANDS+EYESパネル展を開催した。北海道に現存する歴史的土木構造物や先進的プロジェクト、平成28年度の台風災害の復旧状況などを、美しい手書き図面や写真、パネルで紹介し、2日間で延べ約2000人の方にご来場いただいた。

また、例年同様、北見、苫小牧、室蘭、函館においても、関係機関の協力のもとに「土木の日」関連行事を実施し、広く一般の方々に土木の認識・認知度向上に努め、多くの参加者から好評を得た。

東北支部

東北支部は今年で設立80周年を迎えたことから、「土木の日」関連行事としても広く一般の方々に「土木」に触れていただくための行事を実施した。

秋田ランチでは2日間にわたり、雄物川で洪水から住民を守るための「雄物川法水路事業」に着手してから100周年を迎えたことを記念したパネル展を開催した。

(二社)日本建設業連合会東北支部の共催をいただき東日本大震災からの復興工事が着々と進んでいる様子について「UNDER CONSTRUCTION in 東北」と題した土木写真家の西山芳一氏の撮影による大迫力の写真展示をとおりして一般の方が普段目にする事ができない、大型重機と工事に携わる人々のいきいきとした姿を6日間にわたりご覧いただいた。

伊達政宗公が仙台に城下町を築いてから400年以上が経過したなかで、人々の暮らし・生業と地形の関係をひも解きながら、安全・安心の街づくりのあり方を

考えるうえで有用な知見を探り、それを語り継ぐためのアプローチを考えていく「先人に学ぶ地を読む力」と題したシンポジウムを開催した。日本水フォーラム代表理事の竹村公太郎様と宮城学院女子大学学長の平川新様による基調講演をいただき、お二人にコーディネーターおよび4名のパネリストを加えて、地理情報と防災教育への活用、地震考古学的視点から暮らしと災害、地形・地名から読み解く歴史、地形を読み解くテレビ番組制作のこだわりなどを紹介いただきながら討論を実施した。来場者を含めた活発な質疑が展開され、土木に関する来場者の関心が高められた機会となった。

1205 写真展



1205 写真展



秋田ランチ パネル展示状況



1209 シンポジウム

関東支部

関東支部では、関係機関の協力のもとに「土木の日」の関連行事を実施した。

会員・一般を対象とした「現場見学会」では、「東京都港湾局 海の森水上競技場整備工事」および「東京都下水道局 芝浦水再生センター・森ヶ崎水再生センター間連絡管建設工事その2」の見学会を実施し、首都圏で進められているビッグプロジェクトを実感していただいた。

親子を対象とした「親子見学会」では、「新東名高速道路 厚木南IC・伊勢原JCT（仮称）」および「相鉄・東急直通線 羽沢トンネル」を見学し、将来を担う子



親子見学会（工事概要の説明）



親子見学会（参加者とスタッフの全員で集合写真）

どもたちに土木技術のすばらしさを紹介した。また、関東支部内の各技術研究所にご協力いただき、「技術研究所見学会」を実施した。小学生を中心に多数の参加を得て、建設業の役割や新技術開発への取組みを紹介した。

2017年度も家族を含めた会員交流促進の一環として「土木のある風景」写真コンテストを「土木の日」にちなんで11月18日より募集を開始した。関東支部の技術研究発表会（2018年3月7日（水）～8日（木）・山梨大学）参加者による投票形式にて最優秀賞・優秀賞などが決定される。

関東支部には、新潟・山梨・群馬・栃木・茨城の五つの分会があり、各分会において記念講演会、親子見学会、現場見学会など各種イベントを実施し、土木工学のイメージアップと市民生活との関係の周知に活発に取り組んでいる。群馬会「土木遺産『自由旅行の旅』」、栃木会「2017とちぎエクスカーショーン」、山梨会「土木の日視察・見学会」、新潟会「記念講演会」、茨城会「記念講演会」が開催され、土木の魅力を伝えていただいた。

中部支部

中部支部では、関係機関の協力をいただき、「土木の日」関連行事を9月から11月にかけて実施した。

土木に対する一般市民のイメージアップの面では、親子を対象とした「親子ふれあい見学会」及び小学生から大人までを対象とした「市民見学会」を実施した。「親子ふれあい見学会」では、レゴブロックを用いた橋の模型づくりを体験した後に実際の橋梁を見学し、橋を「渡るだけのもの」から「いろいろな形や構造がある面白いもの」として捉え直してもらうことができた。また、「市民見学会」では、富山県で空港・港湾・鉄道、岐阜県で治水施設・高速道路、名古屋市中区で水道・下水道、と幅広い分野を見学し、普段見ることのできないバックヤード見学も盛り込むことで参加者から高い関心が寄せられた。



鷺見橋の見学（エクスカーショーン）



レゴブロックを用いた橋の模型づくり（親子ふれあい見学会）

さらに、教職員、教員を目指す学生及び理工系の学生の団体を対象とした「エクスカーショーン（体験型見学会）」では、「Japan Steel Bridge Competition 2017」に参加した学生及び教員が、東海北陸自動車道4車線化事業として施工中である鷺見橋（日本一の高橋脚）、三尾河橋（鋼橋等）を見学した。橋を研究している学生が実際の構造物・建設工事を見ることで今後の研究や就職に対するモチベーションが高まるとともに、東日本や西日本の学生にも中部地方の土木施設を見てもらう貴重な機会となった。

中部支部では、このほかにも学生間の交流および土木技術者との交流を目的とした「学生と土木技術者の交流会」、学校、生涯学習の場等に講師を派遣する「出前講座」及び「選奨土木遺産のパネル展示」等を行い、土木及び土木学会の認知度向上とともに、将来の担い手の育成に努めている。

関西支部

関西支部では、「土木の日」および「くらしと土木の週間」の活動として、「土木の日」関連行事関西地区連絡会の主催で、さまざまな企画（連絡会行事）を実施した。

「土木の日」ポスター制作では、「つくってみたい未来の交通」道路・鉄道・港・空港をテーマに図案を募集したところ、子供部門285作品、一般部門408作品と、例年に比べて非常に多くの応募があった。大阪府阪南市の小学6年生の作品が最優秀賞となり、土木の日関連行事の広報ポスターに活用した。

「土木の日」コア行事として、本年度は大阪歴史博物館との共催で12月10日にFCCフォーラムを開催し、「あしたの城（ジョー）〜城・石垣をつくる人・まもる

技術／大坂城・熊本城」と題して、豊臣大坂城の築城、文化財としての石垣の構造と修復技術、熊本城で行われている修復の状況とその課題などの講演を頂き、参加者から多くの質問があり、好評のうちに終えた。

同じくコア行事の「どぼくカフェ」として、5月27日に支部年次学術講演会場で「ゲンバ見学のススメ」、8月23日に梅田の地下街の空き店舗をお借りし、参加者全員がヘルメットをかぶって行った「地下街の魅力」アンダーグラウンドにひろがる街の秘密」、9月8日に尼崎のショッピングモールのオープンカフェで実施した「現場のミカタ・重機のミカタ」イラストが伝えるダイナミックな土木の世界」、11月30日に神戸港の旅客ターミナルにおいて「ミナトにまつわるエトセトラ」神戸

中国支部

中国支部では、一般市民の方々に「土木」への理解を深めていただくため、第10回「身近な土木を描いてみよう！ 図画コンクール」を実施した。これは、次世代を担う子どもたちに、生活の中で何気なく見ている身近な構造物を描いてもらうことによって土木に親しむを持ってもらうこと、ならびに、私たちの暮らしが土木技術に支えられていることを感じてもらうことを目的とした行事だ。

夏休みの課題として、中国5県の小中学校に依頼をし、1219枚の応募があった。小学生の作品は、空港や駅など家族で出かけた楽しい旅の絵や、現場で働く機械や電車を生き生きと描く一方で、中学生は橋や復興作業など、社会基盤と日々の暮らしの関わりを豊かな色彩やユニークなアングルで切り取るなど、審査員が目を奪われる力作ぞろいだった。広島市近隣の小・中学校校長などによる審査会は困難をきわめ、ようやく優秀13点と佳作51点を選んだ。

本年度の「土木の日」ポスター



展示期間中の休日に、優秀作品の表彰式を開催し、小橋支部長か



優秀作品を掲載した2018年カレンダー



表彰式（広島市）



展示（土木学会本部）



展示（鳥取市）

ら受賞者一人ひとりに表彰状を手渡した。今年初めて鳥取県内からの優秀作品の入賞があり、鳥取市内のショッピングモール内で表彰式と展示を行った。

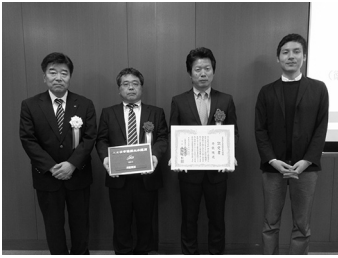
また、優秀作品を印刷した2018年のカレンダーを制作して、受賞者や関係者、関係機関に配布し「土木の日」および「くらしと土木の週間」行事をPRした。

入選作品は、広島市まちづくり市民交流プラザ、イオンモール鳥取北店、土木学会本部、広島県立図書館、中国電力柳井発電所に展示し、多くの方のご来場を頂いた。

四国支部

四国支部では、例年と同様に、「土木の日」および「くらしと土木の週間」の関連行事を関係機関のご協力のもと、一般市民、地域住民、小中学生・高校生等を対象に、土木に対するイメージアップを図るため、四国の各県内で、10月から11月にかけて多彩な行事を開催した。

高松市においては、土木の日記念事業として、今年は11月13日～21日にかけて、JR高松駅コンコース内において、「四国の土木コレクション展」を国土交通省四国地方整備局やJR四国と共同で開催した。また、11月14日に、「選奨土木遺産認定書授賞式（府能隧道／徳島県佐那河内村、徳島県神山町）および鹿島建設（株）大内斉統括技師長による「土木界の生産性向上、担い手確保への取り組みについて」平成28年度土木学会会長タスクフォースの活動を中心



選奨土木遺産認定書授賞式



2017選奨土木遺産「府能隧道」の説明（白柳洋俊選奨土木遺産選考委員会委員長）



特別講演会における会場の様子

に」と題した特別講演を開催し、11月18日には、一般市民や学生に土木に興味や関心を持つ

てもらおうことを目的とした「近代土木遺産巡りバスツアー」を実施した。

主な四国支部の地区行事としては、各県において小中学生や工業高校・高専生を対象に、土木・建築工事などの建設現場や普段は立ち入ることのできないダムや発電所の見学会を実施し、建設産業および社会資本整備への一般理解の醸成、建設産業への魅力発信などに努めた。

さらに大学や高専での土木パネルや土木技術に親しむ企画展示および土木関連の実験などを開催し、多くの参加者に土木技術の知見を深めていただいた。



近代土木遺産巡りバスツアー（早明浦ダム前にて）

西部支部

西部支部では、九州・沖縄各県の9地区に地区幹事を配し、各地区の関係機関の協力の下で「土木の日関連行事」を開催している。以下に、主な開催行事を紹介する。

福岡地区は、土木の日ファミリーフェスタ2017を開催し、参加機関による土木パネル展、無人化施工体験、クレーンお菓子とりゲーム、建設機械試乗体験（バックホー、ホイールローダー、パトロールカー）、都市高速PRコーナー、パソコンゲーム＆お菓子つかみ取り、電子入札デモゲームなどのイベントを行い、約579名の参加があった。北九州地区では、スタジアム親子見学会「まちづくりの仕事を学ぼう！」に32名がご参加、北九州ゆめみらいワーク2017～ミライをえらべ～に約800名の参加があった。佐賀地区では、約1903名が土木の仕事を知ってもらうフェアに参加し、除雪車、クレーン車、バックホーの試乗には家族連れの長い列ができるほど盛況だった報告があった。長崎地区では、土木おもしろ体験隊、浜町模型・パネル展、土木工事現場見学会、長崎みなと見学会、土木遺産モニターツアー、SABOウォーク2017などのイベントが開催され、延べ600人以上の一般人が参加され

た。熊本地区は、土木に親しむバスツアー、熊本の土木工事現場見学バスツアーのイベントが企画・実施された。大分地区では、宗麟大橋現場見学会が行われ、518名の参加者があった。宮崎地区では、土木の日パネル展を開催し、九州北部降雨による被害・復興、熊本地震復興に関するパネルを

展示し、300人を超える参加者があった。鹿児島地区は、土木フェスタ in マリンポルト2017、土木の日パネル展2017を企画し、土木パネル展示、建設機械試乗体験、砂防ダム実験、お菓子すくい、建設マンファッションショーを行い、2600人以上の市民が参加された。沖縄地区は、「沖縄の土木技術を世界に発信する会」第22回シンポジウムを開催し、「観光資源としてみた土木・建築インフラのあり方」魅力的な土木・建築遺産から考える」に関する北河大次郎様の基調講演が行われ、130名の聴講者が参加した。



鹿児島パネル展



長崎おもしろ体験隊